

1面から続く

もしも、缶ビールが姿を消すと、日本の夏はどうなるだろう。

そんな空想に現実感を添える出来事が、国内のアルミ缶の3割を生産している神戸製鋼所で起きた。今春のことである。アルミの強度増加に欠かせないマンガンの必要量を調達できない可能性が生じたのだ。

神戸製鋼は長期契約によって南アフリカから使用するマンガンの半分の安定供給を受けてきた。残りを、中国からそのつど買っていたが、1ト約2000ドルであった年初の価格が、5、6月には7000ドルにまで急騰したのだ。

マンガン価格はその後4000ドル程度にまで下がったが、中国頼みの怖さを感じ知らされた同社は、南アとの長期契約を増やし、中国からの輸入を10%以下に抑える方向に転換し始めた。

レアメタル確保のために、苦渋に満ちた決断を下した例もある。高性能磁石用合金を製造する昭和電工の場合である。

中国頼みの怖さ思い知る

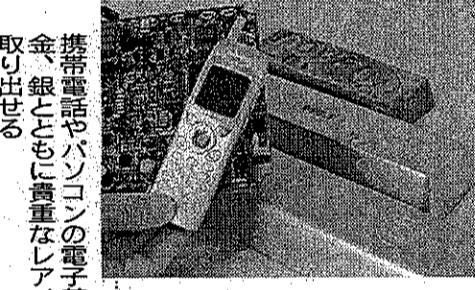
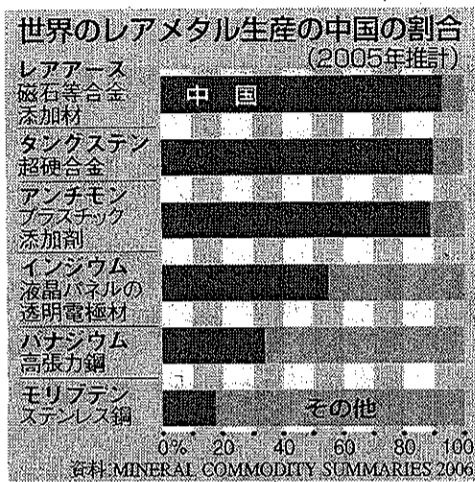
高性能磁石に欠かせないレアメタルがネオジムだ。高性能磁石用合金の性能は、結晶の出来具合に左右される。その結晶の作り方にこそ、昭和電工の競争力の源泉があった。

「だが、増大する需要をまかなうに足る資源確保のためには、ある程度の技術流出はやむを得ない」(海老沼彰電子材料事業部長)と判断した同社は、ネオジウム鉱山を保有する中国企業と合併会社を設立。2003年末、内モンゴル自治区に国内と同水準の工場を稼働させ、今年7月には中国に2カ所目の工場を設立した。

「レアメタルの急騰には、国際的な投機筋も関係しています」レアメタル専門商社、アドバンスト・マテリアル・ジャパン(本社・東京都港区)の中村繁夫社長が舞台裏の一角を明かしてくれた。

「石油に比べると市場規模が小さいので、一部の思惑で相場の操作が可能なのです」中村氏は資源国や投機筋に翻弄されやすいレアメタル問題の解決に、資源外交の重要性を説く。

世界デジタル革命で日中のエネルギー危機と異なるレアメタル危機だ。日本人はデジタル時代の新たな危機を敏感に感じている。と警鐘を鳴らしている。



携帯電話やパソコンの電子基板から金、銀とともに貴重なレアメタルも取り出せる